

ノスタルジーの両義的側面

—V.ジャンケレヴィッチの『不可逆なものとのノスタルジー』を中心として

島村幸忠（京都大学）

ノスタルジーの問題を美学的な観点から論じたものとしては、フランスの哲学者ウラジーミル・ジャンケレヴィッチ（1903-1985）の『不可逆なものとのノスタルジー（*L'irréversible et la nostalgie*）』（1973）ほど大きなものはない。同書は彼の最晩年に書かれたもので、主にベルクソン哲学を踏襲した彼の時間論の集成を軸に議論される、時間における意識の働きと、その意識と共に起こる感情が主題となっている。本発表では、その主題とする問題を中心に扱い、ジャンケレヴィッチのノスタルジー論を考察する。その際、ジャンケレヴィッチ哲学の主要概念である〈器官-障害（*l'organe-obstacle*）〉に、特に焦点を当てる。そうすることで、ジャンケレヴィッチの入り組んだ議論を整理することができ、また、一語で示されるノスタルジーという感情の両義的な性格を浮き彫りにできると考えるからである。『不可逆なものとのノスタルジー』の研究としては、三河隆之やフランチェスコ・コルシーニによるものが近年発表されたものの、前者はノスタルジックな感情に起因する行動の道徳的問題を、後者はその政治的利用の問題を論じており、その感情の源泉を主とした研究は未だ十分になされていない。

ジャンケレヴィッチの主要な関心であった道徳の問題においてと同様に、ノスタルジー論においても〈器官-障害〉は重要な役割を果たしている。〈器官-障害〉はジャンケレヴィッチが主にベルクソンの哲学から抽出した概念であり、この語自体は彼独自のものである。この語は、遅くとも中期に書かれた『イロニー、もしくは潔白な意識』（1950）において見出されるのだが、彼の哲学を通じて使用され続けた。本発表で扱う『不可逆なものとのノスタルジー』もその例外ではない。この〈器官-障害〉は、次のような目的を持って生み出された。すなわち、何かあるものの肯定的・否定的側面、そしてさらには、その否定的側面における肯定性＝積極性（*positivité*）をも強調するために、である。これらは、彼の言うところの〈否定の思考（*la pensée négative*）〉（あるいは反省的な意識）によって浮き彫りにされる。

ノスタルジーの問題においては、そこで重要な役割を果たす思い出（*souvenir*）が〈器官-障害〉として論じられる。つまり、思い出の否定的な側面への配慮が要求されるのだ。このことに留意しつつ、思い出と過去の過去性（*la passéité du passé*）の関係を考察する必要がある。ベルクソンの純粋記憶とも類比的に語られるこの過去の過去性は、まさにノスタルジーの対象とするところのものであり、過去の魅力のすべての原因を担うものである。ジャンケレヴィッチによれば、ノスタルジックな感情の両義的性格は、これら思い出と過去の過去性との関係に由来する。思い出が〈器官-障害〉である限り、ノスタルジーは甘く苦いものといえるのである。それゆえ、ギリシア語の *νοστος*（帰還）と *αλγος*（苦痛）に由来するノスタルジーは、その語源的な意味に含まれるメランコリックな苦痛の側面も取り戻すことになる。